

中部圏の大学の魅力を探る

財団法人中部産業・地域活性化センター

地域整備部 折戸 厚子

日本社会のグローバル化が急激に進む一方、それぞれの地域にはその裏付けとなる文化や個性、いわゆるアイデンティティの再認識とブラッシュアップがますます必要となっています。中部圏にある国立大学においても、それぞれの地域特性を踏まえた個性的な取り組みが行われています。

そこで、「中部圏の大学の魅力探訪シリーズ」と題し、各大学の取り組みを紹介してまいります。第2回は、国立大学法人岐阜大学と、国立大学法人富山大学です。

国立大学法人 岐阜大学

— 地域に貢献する国際性と自立性を持った人材育成 —



1 岐阜大学の概要

大 学 概 要 (2010年5月1日現在)

【所在地】 柳戸キャンパス (岐阜市柳戸1番1、JR岐阜駅/名鉄岐阜駅からバスで約30分)

【教員数】 教授279人、准教授235人、講師46人、助教202人、助手1人

【学生数】 学部5,797人、大学院1,666人

柳戸キャンパスへの集約

岐阜大学は1949年に、岐阜師範学校と岐阜高等農林学校を母体として設立した新制大学である。かつては学部別にキャンパスが分散していたが、2004年の医学部・附属病院の移転を最後に柳戸キャンパス1か所に集約された。

現在は、教育学部・地域科学部・医学部・工学部・応用生物科学部の5学部、連合大学院を含む8研究科を擁する岐阜県唯一の国立大学として、「学び、究め、貢献する」地域に根ざした大学を理念に、地域の期待により良く応える人材の育成に力を注いでいる。

また、岐阜市が設置する岐阜薬科大学との連携によって、医療・健康・環境分野の研究を強化している。岐阜薬科大学は2010年に岐阜大学の柳戸キャンパスへと本部を移転し、学生・教職員の交流がさらに密になった。生命科学の教育・研究機能を集めた一帯は、岐阜県のライフサイエンスの拠点となることが期待されている。

入学者の出身地域では、県外の出身者が半数以上を占めるが、そのうち隣県の愛知県出身者は岐阜県出身者を上回っている。岐阜駅と名古屋駅は電車で20分弱で結ばれており、愛知県出身者には自宅通学の学生も多いという。

2 教育

社会での活躍をめざした「生涯健康教育」

国立大学法人化以降、競争的資金の獲得に積極的に動き、文部科学省の大学教育改革 (GP : good practice) に、全国トップクラスとなる11件

採択されている。そのうちの2007年に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」として採択された「生涯健康を目指した学生健康支援プログラム」は、生涯にわたり心身ともに健康で、社会で活躍する学生を送り出す「生涯健康教育」を課題としている。

20～30年後の健康障害を予防するために、大学生のうちにできる健康管理能力を身につければ、それを習慣にして一生の健康自己管理につながる事が可能として、「岐阜大学の卒業生は、心身ともに健康。生涯、社会で活躍できる人材である」ことをめざしている。

具体的には(1)質の高い健康診断を行いその結果に基づいた個別指導の充実、(2)肥満 (男子学生の13%) や痩せすぎ (女子学生の18%) の学生に対して、専門医や保健士による健康指導の実施、(3)キャンパスの全面禁煙の実現と、ニコチン代替療法を無料で実施、(4)新入生全員に健康調査面接を行い精神科専門医や臨床心理士が継続的に行うなどメンタルサポートの実施、などの取り組みを行っている。

「環境ユニバーシティ」宣言、ISO14001の全学取得をめざす

岐阜大学は、「岐阜大学環境方針」に基づき、環境に配慮した大学を創り出すとともに、環境分野を担う優れた人材育成に努めている。2003年に地域科学部が環境マネジメントシステム (ISO14001) を取得、2009年11月には学長が「環境ユニバーシティ」を宣言し、全学でのISO14001認証取得という目標を表明した。そして同年12月

に「国立大学法人 岐阜大学」としてISO14001の審査登録が完了し、地域科学部に加えて大学本部及び図書館に登録範囲を拡大することができた。

現在、全学への拡充を推進しているが、「学生が一丸となった取り組みを強化することが全学での取得につながる」と学生のISO取得への興味を促し自発的な行動を起こすことを今後の課題としている。その一環として、近年「岐阜大学環境報告書」が学生主体で編集されるようになった。大学の環境配慮の取り組みを学生の目線で評価・記載している岐阜大学ならではの報告書となっている。

3 研究

環境科学と生命科学を2本柱に

岐阜大学では、環境科学及び生命科学を2本の柱として個性化を進めている。環境科学の研究では「野生動物の生態と病態からみた環境評価」と、新しい学問分野である「衛星生態学創生拠点」が文部科学省の21世紀COEプログラムに選ばれている。

また、創薬に関する研究を強化・発展させるため、岐阜薬科大学と連携し、国立大学と公立大学との壁を越えて、2005年に「先端創薬研究センター」を設立した。さらに(独)産業技術総合研究所及び民間企業であるアステラス製薬(株)との連携により、2007年に創薬、分子化学及び医療生命科学に関する教育研究を行う後期3年のみの博士課程の「大学院連合創薬医療情報研究科」を設立した(現在は(独)理化学研究所も連携機関として参加)。両者は補完関係にあり、センターは研究及び地域連携を中心とし、大学院は人材教育を中心とする組織である。

プロジェクト型研究センター

前述の創薬や予防医学を課題とする「先端創薬研究センター」を含めて、岐阜大学には異分野の研究者が連携する6つのプロジェクト型研究センターが設置されている。

- 先端創薬研究センター
- 人獣感染防御研究センター
- 金型創成技術研究センター
- 未来型太陽光発電システム研究センター
- 社会資本アセットマネジメント技術研究センター
- 人間医工学研究開発センター

いずれも、ひとつの学問分野にとどまらない、現代的な課題に対して、獲得した外部資金をもとに学際的に研究者、専門家が結集する研究機関である。

そのうち、「人獣感染防御研究センター」は、中部地方で唯一、獣医学の分野を持つ大学として、狂牛病や鳥インフルエンザなどの社会的な要請に対応するために設置されたものである。

人間と動物に共通する感染症のための治療薬を開発研究するとともに、家畜や野生動物によって起きる感染症の防御対策の研究開発を行う。

また、「金型創成技術研究センター」は、金型産業に従事する人口の割合が全国一位の岐阜県ならではの取り組みである。中小企業を中心とした地域産業の課題調査を発端に、岐阜大学では従来から後継者問題に悩む地元関連企業、岐阜県や大垣市などから要請を受けて、産学官連携による金型産業の振興を図っていた。2006年に、文部科学省の「地域再生人材創出拠点の形成」に採択されたことから、「金型創成技術研究センター」を設立。教員のほか、地元企業から講師として技術者を招き、金型技術の高度化・伝承を継続的かつ着実に



金型創成技術研究センター授業風景

実行するとともに、地域産業振興に貢献する創造的かつ意欲ある若手技術者の育成のため、学部・大学院での教育はもとより、金型実務経験を有する社会人対象の短期集中研修コースを開設している。

4 社会貢献

医師不足と偏在打開をめざし、 地域医療医学センターを設立

地域の医師不足と偏在打開をめざし、2007年4月、地域医療に関わる医師を育てるための「地域医療医学センター」が設立された。

同センターは、大学病院のほぼ全診療科が関与した形になっており、いわば医学部の濃縮版のような機能を取り入れている。教育・研究があって医療があるという考え方で、「医療センター」ではなく「医療医学センター」という名称になったのは、そのためである。

単に目先の医師派遣や医師補充のみを目的としたものでなく、地域医療・医学の卒前卒後一貫教育及び研究を通して、地域の医療確保に取り組むという全国的にもユニークで斬新な試みである。

医学部生、研修医に対して、地域医療医学の卒前卒後一貫カリキュラム（国内外留学も含む）を作成・実施する中で、地域医療の重要性や興味を持ってもらうこと、すなわち「意識改革」を重要なポイントとしている。まずスタートとして岐阜県立下呂温泉病院、さらに、高山赤十字病院をモデル地区とし、大学病院、岐阜県立総合医療センター及び国内外からの指導医師（団）派遣に加え、若手医師研修医、医学生を地域の医療現場に短期派遣し、地域医療に直に触れさせ指導する仕組みを確立している。地域住民を診療する過程で地域医療の重要性の認識や横断的総合医術の習得をすすめるという短期的かつ中長期的の両面の取組みとなっている。

県内の多くの自治体と包括連携協定を結ぶ

岐阜大学は岐阜県内の自治体のニーズに対応

し、それぞれと包括連携協定を結んでいる。

その中で、岐阜県とは、総合企画部地域振興課の地域政策・都市政策監に工学部の教授を起用する人事交流を開始した。全国でも例を見ない国立大学教授の県職員登用により、まちづくりについての助言・提言がなされ、県と大学や学生との橋渡しの役割も果たしている。

そのひとつが、県の長期構想について県民の意見を広く聞く「車座討論会」の開催である。車座討論会は、県職員が問題意識を共有しようと5人以上のグループ会合に出向き、県の抱えている問題を資料で説明、意見交換するもので、第1回は、岐阜大学で行われ、大学生が人口流出などのテーマについて県職員と率直に語り合った。これをきっかけに「車座討論会」は新聞などで大きく取り上げられ、その後の開催において県民の理解を深め、他大学からの参加も促した。

インタビュー

緑の多い広い敷地内には、岐阜大学、附属病院、岐阜薬科大学が立ち並び、岐阜県の誇るライフサイエンスの研究拠点としての体裁を整えています。共に岐阜大学医学部出身の森学長と岡野副学長にお話を伺いました。



森 秀樹 学長 (写真左)

1968年岐阜大学医学部医学科卒業、同大大学院医学研究科博士課程修了。同大医学部助手、講師、米国ネイラー・ダナ研究所客員研究員、助教授を経て、1987年教授。その後、岐阜大学医学部長、同大学理事・副学長を歴任。2008年4月から現職。専門は腫瘍病理学。

岡野 幸雄 理事・副学長 (写真右)

1976年岐阜大学医学部医学科卒業、同大大学院医学研究科博士課程修了。同大医学部助手、講師、助教授を経て、1993年教授。2010年4月から現職。

専門は生化学。

岐阜大学出身者からみた大学の特徴

—学長は、初の岐阜大学出身の学長で、岐阜大学一筋で歩んでこられたそうですね。

森 高等学校も岐阜で、アメリカに2年間留学していた以外はずっと岐阜にいました。自分のことを岐阜原人と呼んでいます（笑）。

井の中の蛙という風に揶揄される場合もあります。しかし、外から冷めた目で大学を見るということも大事ですが、内側を良く知っているということも大事だと思います。それから、人一倍、愛校心があると自負しています。

—そういう森学長からみた岐阜大学や学生の特徴はどういったものでしょうか？

森 歴史的に岐阜大学は実学に強い大学と評価されています。裏を返せば、理系の印象が強く、文系の印象が弱いということになりますが、学生の多くは文系を志望しているので、人気とかブランドなどの観点から言えば、知名度が今ひとつなのかもしれません。

特色としてははっきりとしていることは、全ての学部がひとつのキャンパスに集まっていることです。国公立大学は学部が分散している大学が多いですが、本学はひとつのキャンパスに集まっていることで、学校の運営、学生の健康管理等を機能的に行うことができます。

岐阜薬科大学も同じキャンパスに移転してきたことにより、留学生の存在も含めてさらに異分野での学生同士のコミュニケーションがとりやすくなっています。

大学への交通アクセスはやや不便だと言われています。名古屋駅から岐阜駅までは電車であっという間に来ってしまうのですが、岐阜駅からはバスで30分かかります。何か良い交通システムができないのか常に考えています。今度、ドイツ製の連節バスが岐阜駅から岐阜大学間を走るの、学生諸君に目新しさを感じてもらえると期待しています。朝日新聞のランキングでは、自動車免許を保持している学生数が、全大学のうち1位だったそうです。その他、おもしろいデータでは、朝食を食べてくる学生数が4位でした。交通アクセスの影響なのかどうかはわかりませんが…。

—岐阜大学の卒業生は、一生、健康で長生きすることをめざした指導をされているそうですね。

森 保健管理センターが、新入生全員に採血検査

や心電図検査などの診断を実施して、メタボの学生を作らないとか、病気にさせないという観点でチェックしています。若い頃の4年間というのは生涯続く習慣を作っていく時期なので、心のケアを含めてきちんと指導していきます。

岡野 「大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理」という本を出していますが、いろいろな大学でも使われているようです。

自立性があり、国際性がある人材育成

—岐阜大学の教養教育の取り組みについてお聞かせください。

岡野 かつては教養部がありましたが今はそれがなくなり、各学部の先生に、かつて教養教育といわれていたような一般的な教育をやっていただいています。

ゆとり教育といわれていますが、理系の学生の場合でも、理科系の科目を高校時代に1科目しかとっていない場合が多々あります。例えば、応用生物科学部の学生が、物理だけを履修していて、生物をほとんど学習していない場合がありますが、本来、生物は知っておいてもらいたい分野です。今年から、そうしたりメディアル教育（補修教育）として、高校を退職された先生などの助けを借りながら、最低限、高校の生物、物理、化学などの実力を身につけてもらえるようにしています。

森 産業界にどういう人材が欲しいか意見を伺うと、豊かな教養を身につけ、人格のしっかりした人を出してほしいという要望を聞きます。極端な

話ですが、大学に研究をやらしてもらわなくてもいいから、教養と人格を重視してほしいという意見もあります。

教養や人格に関しては、子供の頃からの家庭教育も関係することですし、いろいろなカリキュラムを用意し、マンパワーを要することなので難しい課題ですが、岐阜大学としては、地域に貢献できる人材を育てていきたいと考えています。

さらに言えば、自立性があり、国際性がある人材育成をめざしています。自立性があるということはどんな環境でも生きていくことができるということです。また、国際性にはある程度以上の語学力をつけてもらう必要があると考えています。それらを教養教育としてしっかり教えて、専門教育へと進めていきたいと考えています。

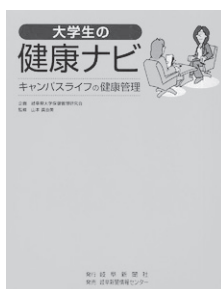
日本では、一般的に18歳で大学に受け入れて、4年後に社会へ送り出します。しかし、世界的に見れば、いろいろな社会経験を積んでから大学に入学するのが一般的です。日本のように、18歳で受け入れ、4年間で社会に貢献できる人材を送り出すということは簡単なことではありません。

ですから、自立心があり健全な心身を保持できる学生に育てることが重要と考えています。そのために、保健管理センターでは、体の健康だけでなく、メンタルヘルスのチェックも行っています。

語学力の向上については、教養教育推進センターにおいて戦略をたてて、英語教育を充実させるための努力をしています。最終的に社会から期待されている就業力を身につけることに力を入れていきます。

大学院に関しても、好きな研究をすることも大事ですが、実社会のニーズを踏まえた発想や国際的視野を身につけてもらうことも必要と考えています。そこで、産業を牽引できるような人材を育てる「イノベーション創出若手人材養成センター」の設置など、大学院教育改革プログラムを進めています。

岡野 現在、就業力育成のためのキャリア教育に向けた授業をいくつか開設しようとしています。本学の卒業生や、第一線で活躍している人達を講



大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理

師に招き、生き抜くこと、働くことの意味といった講義をしてもらいます。

また、大学の学力低下は、小、中、高の学力低下と密接に関連しています。そうした問題を高等学校の校長と議論する会議も行っています。高校との連携として、岐阜大学の教員が高校に出かけて行く出前講義を岐阜県内だけでなく、北陸などの県外でも行い、高校生がいろいろな研究分野への理解を深め、学問への動機付けや学習意欲の喚起となるよう働きかけています。

産業動物医の育成が課題

—中部で唯一の獣医学課程をお持ちですね。志願者は多いですか？

森 多いですよ。特に女性に人気があります。学士教育については、鳥取大学、京都産業大学と連携して、「獣医・動物医科学系教育コンソーシアムによる社会の安全・安心に貢献する人材の育成」プログラムを構築しています。

岐阜大学は放射線治療学が得意で、鳥取大学は放射線診断学が秀でています。京都産業大学には鳥インフルエンザ研究の人材がいます。それぞれ違った特徴を合わせて教育内容の充実を図っています。

博士課程については、帯広畜産大学、岩手大学、東京農工大学と連携して連合獣医学研究科を設置し、高度専門技術者、研究者を育てています。

獣医学志願者の多くは、犬や猫のペットの獣医に憧れて入学を希望しています。日本で今、一番問題となっているのは、牛、馬、豚などの産業動物を扱う獣医が不足していることです。

岐阜県などの場合、飛騨牛などの産業動物を扱う獣医の需要が多く、獣医師会からも産業動物医を育成してほしいという要望があります。そうしたニーズに対応することも重要であり、責務として取り組んでいます。学生実習として、実際に農家を訪れ、診療の現場を体験する取り組みを行っていますが、こうした実習教育を通して、産業動物への関心を高めてもらいたいと考えています。

ライフサイエンスの研究拠点として、この地域の発展につなげていきたい

—岐阜薬科大学と同じキャンパスになりましたが、将来的には合併ということもあるのでしょうか？

森 そうはなりません。各々の大学の運営にあたっての予算出所が異なりますので、今後も連携をとりながら教育研究を実践していきます。

国立大学と公立大学が連携して連合大学院を設置するまでには、いろいろな課題がありました。法人化を契機に自主的な大学運営が可能となったことから、ハイスピードで改革できました。岐阜薬科大学は、2006年に定員の多くを薬剤師国家試験受験資格が得られる6年一貫教育へとシフトさせました。そうなりますと施設の整備が必要になりますし、実習のための病院も必要になります。そこで岐阜大学キャンパスでの新学舎建設が実現したのです。岐阜薬科大学の学舎7・8階に岐阜大学大学院連合創薬医療情報研究科と先端創薬研究センターがあります。

岐阜薬科大学の学生は、岐阜大学医学部の講義を聴講できるようにしています。また、本学にとっても、薬を研究する大学が同じキャンパスにあることは、教育・研究に有益です。

岐阜大学には、3つの連合大学院がありますが、国立と公立の大学の組み合わせはユニークで、国内でも初めての試みとされています。

こうした連携により、薬学と医学とその他の生命科学が横断的な研究を展開できるようになりました。今後はこの地域をライフサイエンス（生命科学）の研究拠点としての発展につなげていきたいです。

地域社会の問題に対しての岐阜大学の対応

—社会連携についてお聞かせください。

森 岐阜大学は、岐阜県や岐阜市、大垣市、高山市、関市、可児郡御嵩町等と包括連携協定を締結しています。包括連携で何に取り組んでいるかは、

自治体によって違います。

もともと、医療、地場産業、教育、地方行政などで連携していましたので、さらに役割を明確化して包括連携協定を結びました。

自治体への協力において特筆すべきところで、御嵩町の亜炭鉱の問題があります。御嵩町は昔、石炭の一種である亜炭の採掘が行われ、町内のいたるところに坑道が残り、近年、その坑道による陥没事故が発生するようになりました。大規模地震が発生した際には町全体が陥没する可能性があり、御嵩町では対策に追われています。岐阜大学ではそのような問題に対して、地震工学や地盤工学などの観点から協力しています

各自治体からは、特に人材派遣に協力いただいています。産学官連携に際して、地場産業に詳しい地元の方にコーディネーター的な役割を果たしていただいています。

—医師不足問題に対応した地域医療医学センターを設置されたそうですね。

岡野 地域医療医学の学生を受け入れ始めて3年目です。これから実際に卒業して社会の役に立つようになっていくのは10年くらいかかるかもしれません。

医学部の中に地域医療医学センターにおいて、学生に地域医療の現場を体験してもらうなどの取り組みを始めました。地域医療の問題について、センター設置という形で立ち上げをしたのは、全国的に見て早かったと思います。沖縄や長崎などでは離島の医療をどうするかということが問題に



常駐するドクターヘリ

なりますが、岐阜県の場合は陸続きです。これからはドクターヘリが大学病院に常駐しますので、県下どこへでも行けるようになります。

留学生が来ることは大学の活性化につながる

—大学の国際化についてお聞きしたいのですが、最近、上海とバングラデシュに事務所を設置されましたね。

森 少子高齢化時代がやってくるので、アジアの活力を得ることはとても重要と考えています。

岐阜大学には現在、元留学生で教授になっている方が5名います。上海には、岐阜大学の同窓会があり、その会長さんの会社のオフィスの一角を貸していただいて、ホームページの設置などの広報活動をしています。バングラデシュも同様です。

現在、400名弱の留学生が在籍していますが、留学生が来てくれることは、大学の活性化、国際化にもつながります。産業界からも、ベトナム等からの学生がいれば紹介してほしいといった声を聞きます。社会に貢献できる学生を育て、そういう要望に応えるのも私たちの責務と思っています。

—最後に、これからの岐阜大学の目指す方向性についてお聞かせください。

森 第二期の中期目標に地域に貢献できる人材を育てることを掲げており、それに尽きると考えています。地域貢献といっても、教育、産業、医療など貢献のかたちは様々ですが、国際性と自立性を持った人材を育てていくつもりです。

そのために、私たちも教育の質の向上を常に考え、実行していかなければなりません。先ほど話題にも出たように、産業界の方から学生に自分の経験を話してもらうなど、卒業生・産業界などと情報交流しながら質の向上に努めていきたいと思っています。

インタビューを終えて

生涯にわたって心身の健全を保持できるよう学生を指導することこそが、自立性を持った地域に貢献する人材育成の基本となるという岐阜大学の看破に感銘を受けました。

短期的かつ中長期的、両面の取組みとなっている点は、地域医療医学センターの取組みとも同様、地域の健康を守り育む「ライフサイエンス」の拠点としての岐阜大学の一貫性のある姿勢が感じられるインタビューでした。

国立大学法人 富山大学

— 「知の東西融合」の世界の拠点に —



1 富山大学の概要

大 学 概 要 (2010年5月1日現在)

- 【所在地】** 五福キャンパス (富山市五福、JR富山駅からバスで約20分)
杉谷キャンパス (富山市杉谷、JR富山駅からバスで約30分)
高岡キャンパス (高岡市二上町、JR高岡駅からバスで約20分)
- 【教員数】** 教授328人、准教授253人、講師76人、助教207人、助手22人
- 【学生数】** 学部8,142人、大学院1,186人

全国初、3つの国立大学が統合

現在の富山大学は、2005年10月、旧富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学を再編・統合して誕生した。3つの国立大学の統合は全国初であり、統合により富山大学は、人文学部、人間発達科学部、経済学部、理学部、医学部、薬学部、工学部、芸術文化学部の8学部に加え、和漢医薬学総合研究所、附属病院の10部局からなる強力な教育研究体制を持つ、金沢大学、新潟大学と並ぶ日本海地域を代表する総合大学となった。

3つの旧大学のキャンパスは、五福キャンパス、杉谷(医薬系)キャンパス、高岡(芸術文化系)キャンパスとしてそれぞれ維持されている。

2 教育

立山マルチヴァース講義

再編・統合を契機に、富山大学の教養教育に1年生を対象とした「立山マルチヴァース講義」が誕生した。この講義は3つのキャンパスに所属する専門領域の異なる教員が、相互に連携をとって実施する総合科目的授業である。

立山マルチヴァース講義の「立山」は富山県の象徴である「立山連峰」からとられている。また、「マルチヴァース」は、15世紀の欧州で大学が始まった際、真理はひとつであり、その真理を究明するのが大学の使命として、「一つの真理：ユニヴァース」が大学を意味する「ユニヴァーシティ」

の語源となっているのに対して、ひとつの真理でなく、多様な考え方を相互に理解し合うための「マルチヴァース」が必要という考え方からきている。

この講義には、「富山学—わたしの富山」「心(こころ)、身体(からだ)、そして生命(いのち)」「感性をはぐくむ」の3つの科目がある。

●富山学—わたしの富山

富山の自然や地域性に関する幅広い知識を持ち、グローバル*な視点を身につける。

●心(こころ)、身体(からだ)、そして命(いのち)

様々な考えにふれて、命の大切さや尊厳について語り合えるようになる。

●感性をはぐくむ

人のもつ感性の多様性や豊かな感性から生まれるものの可能性を知り、充実した人生を切り拓くための糧になるようにする。

さらに今年度からは、富山大学の歴史、教育、研究、社会貢献等を知ることを通して、富山大学生として学ぶ喜びと誇りを共有し、社会的使命感を持つことを目的として「富山大学学」を新たに開講した。

* global+localの造語。地域性も考慮してグローバルな視野に立つという意味。

知の東西融合

富山大学では、統合以降大学の目指すテーマとして「知の東西融合」を掲げた。富山大学は日本海を挟んで、シベリアや中国、そこから続く中央アジア等との交流と研究を以前から進めてきた。「知の東西融合」とは現代社会の根源をなす西洋文明の系譜に日本及びアジアの歴史・伝統文化・精神を融合させようとするものである。

文部科学省の21世紀COEプログラムに採択された「東洋の知に立脚した個の医療の創生」の実施により、西洋医学と東洋医学の異なったパラダイムの融和、「東洋の知」を基盤にした人材の育成、国際的伝統医薬学研究教育拠点化の実現を目指してきた。

また、伝統的な薬業の蓄積を基に世界の生薬を収蔵した「民族薬物資料館」は、こうした学術活動の成果の一端である。また、附属図書館にある「ヘルン文庫」は、東洋の知を求め続けた小泉八雲の蔵書であり、「知の東西融合」を目指した象徴的存在である。

●民族薬物資料館

日本漢方だけでなく、世界各国の伝統医学で用いる生薬標本を約27,000点保存・展示。植物標本・本草書も所蔵しており、質・量とも日本第1位の生薬資料館である。



薬都・富山が誇る貴重なコレクション民族薬物資料館

●ヘルン文庫

「耳なし芳一」「雪女」などの怪談で知られるラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn 1850-



ヘルン文庫のヘルンはハーン「Hearn」のローマ字読み「ヘルン」からきている

1904 / 帰化後の名前は小泉八雲) の旧蔵書。洋書2,069冊、和漢書364冊、手書き原稿を所蔵している。

3 研究

和漢医薬学総合研究所による 東西医薬学の融合

和漢医薬学総合研究所は、日本唯一の伝統医薬学の研究所として、先端科学技術を駆使して伝統医薬学を科学的に研究している。

伝統医学は人類が自然の摂理と天然の恵みを巧みに利用し、疾病の予防、治療にあたってきた経験知の集積と考えられる。同研究所では近年著しく発展した先端科学技術を駆使することにより、この伝統医学やそこで使われる薬物を科学的に評価し、東洋医学と西洋医学の融合を図り、新しい医薬学体系の構築と自然環境の保全を含めた全人医療の確立に貢献することを目的としている。

そのため研究所は(1)天然薬物資源の確保と保全、(2)和漢医薬学の基礎研究の推進と東西医薬学の融合、(3)漢方医学における診断治療体系の客観化と漢方医療従事者の育成、(4)伝統医薬学研究の中核的情報発信拠点の形成などに関する重点課題を設定し、研究所内の横断的連携、国内および国際的共同研究を推進している。

このように富山大学の掲げる「知の東西融合」にもつながる東西医薬学の融合という新しい医療学体系の構築が図られている。

極東地域研究センターの活動

統合前の旧富山大学に2001年4月に設立された極東地域研究センターは、経済、社会、環境の面から北東アジアという地域を研究している。

研究対象である北東アジア地域とは、中国東北地域、朝鮮半島、ロシア極東地域、並びに日本を含む環日本海を構成する地域である。

近年、成長著しい北東アジアだが、一方でそれと比例するように自然環境は悪化してきた。北東アジアでの多様な地域発展類型の存在に着目し、経済発展と資源制約、雇用問題、大気・水循環の変化と人間生活などの諸問題を分析し、北東アジア地域の経済発展が社会的安定と環境保全を伴いながら実現される道筋を探究している。

また、富山県からの委託を受けて、毎年、北東アジアに関するテーマを決めて調査研究を行い、シンポジウムを開催し、広く成果を公表している。さらに、中国・韓国・ロシアの研究機関と学術交流し、毎年国際会議を開催している。

4 社会貢献

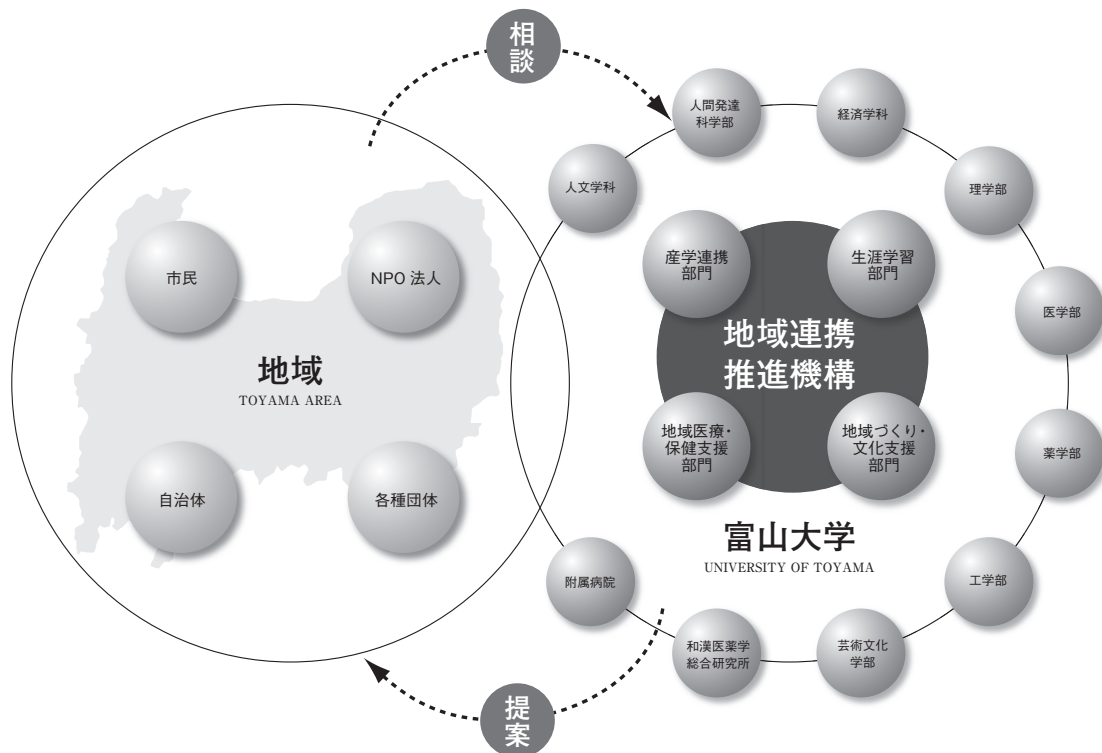
地域連携推進機構

富山大学はこれまで様々な形で「地域貢献」に取り組んできた大学である。統合前の3つの大学には、地域に開かれた様々な活動や、地域連携事業を実施するセンター等が設置されていたが、2008年に地域連携推進機構を設立して一本化した。

地域連携推進機構は、これまでの流れを踏まえて、「産学連携部門」「生涯学習部門」「地域づくり・文化支援部門」「地域医療・保健支援部門」の4つの部門で構成されている。

共同技術開発、社会人教育、地域おこし、医療問題などの地域との連携に係わる機能をひとつの組織にまとめることで、多面化・多様化する地域のニーズにスピーディ・フレキシブルに対応することを目的としている。

そのため、複合的な連携を要するような課題や、「何処が大学の担当か判らない」といったようなとき、総合窓口が関連部門との連絡調整を行って



地域連携推進機構 概念図

いる。

4部門を横断するコラボフェスタの開催

地域連携推進機構は、地域社会の要請に応え、地域活性化のための数多くの事業を展開しているが、2009年からは、こうした取り組みを地域に向けて情報発信するためのコラボフェスタを開催している。

産学連携、生涯学習、地域づくり、地域医療の4部門からの特別講演、シンポジウム、新技術の発表等では、参加者との様々な双方向交流が図られている。

インタビュー

標高3,000mの立山連峰と水深1,000mの富山湾を望む富山平野の中央に位置する富山大学。この高度差4,000mもの空間における「水の大循環」が多様な生態系を育み、固有の文化と地域に根差した様々な産業を育て、富山大学の発展と有為な人材の育成を支える基盤となってきた。今回は西頭学長に富山大学の過去、現在、未来のお話を伺いました。



西頭 徳三 学長

1968年静岡大学農学部卒業。1970年京都大学大学院農学研究科修士課程修了。1980年京都大学農学博士。1972年京都大学助手、山口大学助教授、愛媛大学教授、高岡短期大学長を経て、2005年10月から現職。

専門は農業経済学、水資源管理論。

3大学のルーツはつながっていた

—3つの国立大学が統合して現在の富山大学になったそうですが…。

西頭 2005年10月に県内の3つの国立大学が一緒になりました。ただ3つの大学は、独立した大学ではあったけれど、相互に関連していたのです。もともと高岡市に、高岡高等商業学校という経済専門学校がありました。それが戦前に工業技術者不足に対する国家的要請によって工業専門学校に変わったのです。その工専が、後に富山大学の工

学部になります。

また、新制富山大学は、1949年に発足しましたが、その時点で高岡高等商業学校の卒業生から、経済の学校をつくってほしいという要望があり、富山大学に経済学科ができ、やがて経済学部になります。

高岡市にあった工学部も、富山市のキャンパスに移ることになったのですが、高岡市から高等教育機関が無くなってしまうと運動が起これ、工学部があった高岡に高岡短期大学ができたのです。

さらに、田中角栄内閣の時代に、一県一医大構想として医科大学を全国に設立し、無医大県の解消が図られました。その際、富山大学にあった薬学部を新しく設立する医科大学に移しました。それが富山医科薬科大学です。ですから、富山大学、高岡短期大学、富山医科薬科大学、どちらも、もともとのルーツは同じで、それを1本化したのです。

3つの大学がひとつになったことで、富山大学は金沢大学、新潟大学と並ぶ日本海側の基幹的総合大学になりました。

教育への地域の熱意が富山の伝統

—学長がお考えになっている富山大の特徴はどういったものでしょうか？

西頭 3つの大学は、それぞれ地域の特色を反映してできた学校でした。高岡短期大学は、芸術系の学校でしたが、それは漆器や銅器などの高岡の地場産業を反映したものです。統合の際には、4年制の芸術文化学部として再編されましたが、芸術系の学部があるというのは、今の富山大学の大きな特色となっています。

また、富山大学薬学部のルーツである富山薬学専門学校には、明治以来の約120年の歴史がありますが、さらに古い話をすると、富山藩の2代藩主、前田正甫が、薬の製法を領内に広め越中売薬の基礎を築いたことにつながります。富山は冬になると雪が降るので仕事なくなる、そこで、その間には売薬という形で全国を売り歩くようにな

りました。それが薬王国富山の始まりです。それがベースになって富山薬学専門学校ができました。本学の薬学部はまさに富山の自然風土を背景にした学部と言えるでしょう。

また、人文学部、理学部は、旧制富山高等学校をルーツにしています。この学校の非常に珍しい点は、私学でスタートしていることです。

富山湾は、かつて北前船による貿易が盛んでした。その北前船の廻船問屋のひとつである馬場家は、富山県の税金の半分を納めていたと言われるほどの財力がありました。その馬場家の未亡人である馬場はるさんが、富山の子弟が入れる良い学校を作りたいと私財を投入し、敷地も用意して、富山湾の近くに旧制富山高等学校を発足させたのです。

これもある意味、富山の伝統といえます。富山県は教育県といわれていますが、それは貧しかったからです。かつては雪が2mくらい積もりました。すると働けないから出稼ぎに行きます。売薬はそのひとつです。貧しいから、子供の教育というのは非常に重要でした。だから私財を投じてでも学校を作るといふ馬場はるさんのような方が出てきたのだと思います。富山県にはそういう進取の気性みたいなものがあります。そうした教育熱心な気持ちが学校をつくって、それが現在の富山大学に引き継がれています。なんとかして郷土の教育のために尽くしたいという精神が脈々とつながっている。そういう歴史を知ることによって、誇りをもってほしいと思います。

「知の東西融合」のテーマは大学の歴史から

—富山大学の掲げる「知の東西融合」についてお聞かせください。

西頭 私が学長に就任した時、執行部とともに、大学には理念が必要だと考えました。そして富山大学が行ってきたこれまでの教育研究の歴史を抽出したときに「知の東西融合」という言葉が出てきたのです。



ラフカディオ・ハーン（日本名：小泉八雲）

その象徴のひとつとなるのが「ヘルン文庫」です。なぜ富山大学にラフカディオ・ハーン（日本名：小泉八雲）の蔵書が来たのかは、旧制富山高等学校の創設の頃に遡ります。

学校の創設準備に奔走し、初代校長となった南日恒太郎氏が弟の田部隆次氏から、ハーンの遺族が小泉家に保存されていたハーンの蔵書を安全に保管してくれる大学に売却したいと考えていることを聞きました。田部隆次氏は東京帝国大学の英文科におけるハーンの教え子で、ハーンの妻である小泉せつ夫人とも親交があったそうです。

はじめは法政大学に話があったそうですが、この蔵書の件を聞いた南日恒太郎氏は、これは新設の富山高等学校に全国から優秀な研究者を集めるために、ぜひとも確保したいと考えました。そこで先ほどの富山高等学校の設立に私財を投じた馬場はるさんの援助をお願いしたところ、二つ返事で引き受けて下さったそうです。こうして、人と人との出会いの奇跡のように、富山にやって来たのです。

ラフカディオ・ハーンは母がギリシャ人で、ギリシャで生まれています。父はイギリスの軍医でハーンは2歳の時に母とともにイギリスに行きます。しかし2人の結婚は不幸なもので、父母の離婚後、ハーンは大叔母に育てられ、イギリス、フランスの学校で教育を受けました。その後、アメリカのシンシナティとニューオーリンズで新聞記者になって、いろいろ勉強したということです。

当時集めた本が、「ヘルン文庫」の2,500冊の中にいっぱい入っています。

来日後は松江、熊本、神戸、東京に住み、「怪談」などの作品を書きます。彼は一般に小説家とされることが多いですが、むしろ、柳田国男に先駆ける最初の民俗学者だと言われています。非常に幅が広い人物です。一度、ここのキャンパスの中にある2,500冊の本をご覧になるといいですよ。

考えてみてください。ギリシャ、イギリス、フランス、アメリカ、日本に来て、しかも日本人と結婚している。まさに知の東西融合ではないですか。そういう財産をたくさん持っているのが富山大学であり、もとは旧制富山高等学校でした。

また富山では、和漢医薬学を昔から研究していました。その一方で、明治以降、西洋医学が入ってきています。これも、まさに知の東西融合です。富山県は日本海をとりまく地域のひとつであり、一衣帯水の地である対岸には、中国の遼寧省、シベリアのウラジオストクがあります。中国の上海、そこから中央アジアを歩いていけば西欧につながります。我々のやっていることは、知の東西融合的な学問であり、その実績を積んできました。

和漢医薬学総合研究所には、富山医科薬科大学の難波恒雄先生が世界中を回って集められた生薬が収蔵されている民族薬物資料館があります。中国、東南アジア、中央アジア、エジプト等の約27,000点余の生薬標本が集まっています。現在では条約等で規制されて、一部の生薬は入手できないので大変貴重な財産です。東西融合のシンボリックな資料館なのです。

現在、アフガニスタンやイラク、イランとアメリカの紛争が続いています。これは文化や民族性の違いから生じているのでしょうか。そこで、東西の文化の融合を図ることが21世紀の富山大学の役割になると思います。過去、現在、未来に向かって「知の東西融合」を図ろうという大きなテーマになっています。

ところで、和漢医薬学総合研究所は世界のナンバー1というより世界のオンリー1の研究所です。全国の研究者が利用する研究拠点「和漢薬の

科学基盤形成拠点」として文部科学省の共同利用・共同研究拠点の認定を受けています。ここには多数の留学生在いて今や富山大学のものというより全国、世界の研究拠点となっています。

この研究所は、北京大学に分室（海外拠点）を持っていて、富山大学の大学院の出身者が、北京大学で教授になっています。また、タイのチュロンコン大学との学術交流事業も行っており、さらに、エジプトにも拠点を作るといふ動きをしています。

世界とつながる富山大学

—地域の大学が海外と直接結び付きはじめていますね。

西頭 かつては東京大学が頂上にあって、京都大学等があとに続くという形でうまく機能していたのでしょうか。しかし現在、中部圏でやっというとするならば、東京を經由して頑張ろうとしても駄目です。世界と直接つながらなくてはなりません。そういう意味で、富山大学の和漢医薬の研究は世界とずっとつながっていました。その先駆者として難波先生はすばらしい人だと思うのです。

また、旧富山大学の時代に、極東地域研究センターができました。富山大学には北朝鮮経済の専門家がいます。それから、ロシア経済の専門家もいて、ロシアの中央アジアの移民や、彼らのモスクワへの出稼ぎ等の民族の移動を研究しています。先日、富山で研究会をしました。規模は小さいですが、これも特色のひとつですね。

「教育」における教養教育の重要性

—教養教育についてのお考えをお聞かせください。

西頭 少子高齢化問題に全国の大学が頭を痛めています。生き残る道はひとつしかないと思います。それは「教育」です。研究もちろん必要ですが、研究は教育の前提条件です。まず研究をしっかりと行って、さらに教育をいかに熱心にやるかが富山大学の生き残る道です。教育は100年の計その

ものです。明治時代の先輩達の熱意が、橋をつくり、学校を建て、現代のいろんな結果を生みました。ですから長期的視野で考えると教育の重要性がおわかりになると思います。

その中でも特に教養教育というのは絶対に忘れてはいけないと思います。自分の研究をわかりやすく学生に伝えていくのに、教養教育というのは大事な手段だと思いますし、専門教育と並んで、重要なものだと思います。

—その教養とは何でしょうか？

西頭 教養というのは、100人いれば100人の教養があり、一口で言えません。旧制高等学校の教育は、語学に特化してドイツ語をどんどん勉強させたりしました。かつての大会社の社長連中は旧制高等学校で徹底的にたたきこまれています。

一方、旧制高等学校を出ていなくても、松下幸之助さんのように、実社会に出て教養を身につけた人もいます。私は教養というものは、肌を通して、学んでいくものではないかと考えています。

例えば、ノーベル賞をとった湯川秀樹の父は小川琢治といって人文地理学の学者です。湯川兄弟は全員、京都大学の教授になれましたが、ものすごい教養一家で、皆、漢学漢籍を読んでいました。原子物理学の中間子論は、彼らの素養のなかの一部だったのです。また、朝永振一郎の父は京都大学の学者で哲学者です。

中間子論と中国文化論がうまくかみ合うということはないかもしれませんが、私はそうした素養が、教養であると考えます。すぐに役には立たないかもしれませんが、そういうことを知っていることが、何か行き詰まった時などにひとつの指針になるのではないのでしょうか。

ヨーロッパの政治家には一流のアーティストもいます。かつて西ドイツの首相であったブランドは一流のピアニスト並みの腕前と言われていました。日本の首相は、レセプションなどですぐに円高の話をしよとしますが、海外ではまず芸術論などの話題ができなければ話にならないのです。ですから教養を身につけるといふのは非常に重要

なことだと思えますね。

—富山大学の教養教育についてお聞かせください。

西頭 富山大学の教養教育については、立山マルチヴァース講義から始めて、最終的には一本化して専門教育に負けない教養教育をつくるというのが課題です。体制を整えながら、4・5年先に教養教育を一本化しようという話をしています。

立山マルチヴァース講義には、3科目があります。1つは「富山学」、富山の成り立ちや歴史を調べます。2つめは「心、体、そして命」。今、メンタルヘルスに関わる問題はものすごく多くあります。大学でも残念ながら自殺する人、学校に出てこない人もいます。そうした問題にどう対応するかというと、まず自分の体を知らなくてはなりません。そして心、命を知るのです。

3つめは「感性をはぐくむ」。感性というのは非常に重要です。人間は感情の動物ですから、感性で生きているのです。美術的な感性など、いろんな感性をはぐくみます。

最近、それだけではなく「富山大学学」をやるということになりました。これは今年度の後期から始まります。一言で言うと、富山大学の歴史、活動を学ぶ授業です。学生達には自分が学んでいる大学のことを知って、富大生として学ぶ喜びと誇りを持ってほしいと、人文学部の先生を中心にやることになっています。

科学の融合教育で生命現象を探る

—近年、学部の融合が盛んですね。

西頭 富山大学には、大学院生命融合科学教育部があります。富山大学が統合したときに医学部、薬学部、理学部、工学部の先生方が集まって、それぞれの専門分野を基礎に生命を科学するという新しい概念で博士課程教育を行うことにしました。科学の融合教育です。

色々な生命現象を、医・薬・理・工という4つの専門分野を基礎として融合、学際的な教育・研究を行うというのは、非常にユニークで日本では

ここにしかありません。

例えば、いわゆる障害者の問題に取り組んでいます。耳の聞こえない人や目の見えない人は、代替の能力がものすごく発達しています。他の感覚が健常者の何倍も高いのです。生命融合科学教育部ではそうした代償性の能力に目を向けた研究をしています。

また、それに関連して富山大学では、拒食症や自殺防止などメンタルヘルス問題に先駆けて取り組んでいます。21世紀中頃になると、おそらく教育の中でこの問題が一番大きくなると思います。富山大学の特色のひとつとして、今後、そうした研究に取り組んでいきたいです。

地域に果たす富山大学の役割は何か

—大学の社会連携をどのようにお考えでしょうか？

西頭 少子高齢化で大学が生き残るには、まず教育だと言いましたが、もうひとつは社会貢献だと思います。

社会貢献をこれからどれくらい展開していけるかというのが、大学が存在感を発揮するひとつのキーワードになるだろうと思うのです。富山県は機械産業やアルミ産業、薬産業が発達しています。福井、金沢に比べて、いわゆる近代の製造業、機械産業がものすごく集積しています。

小さい会社だけれど、世界一の技術を持っているという会社が多いです。非常に特色があって、この会社が止まると世界の会社が止まってしまうという会社も多いです。そこに大学が参加して、そういう技術をいかに地域と共有するか。そしてさらにレベルアップして、イノベーションを生み出していけたらと。

地域イノベーション創出の道具のひとつとしての役割を果たすのが富山大学です。今はそこまでの意思統一はできていませんが、これからだと思いますよ。

一この地域が成りたっていくために、非常に重要な機能という気がしますね。

西頭 私の専門は農業経済学で、この30年ばかり、全国の色々な地域おこしのプロジェクトを提言してきました。そうやって様々な地域の活動をみて回って感じたのは、現場の市町村にはいわゆる企画力が乏しいという現状です。どうしても金太郎飴的な発想になってしまっている。いろいろなアイデアを持つ首長もいらっしゃるけれど、そのアイデアを具体化するのが大変難しい。

地方分権といっているけど、前に進まないのはなぜでしょうか。それは、いまだに中央集権で、中央の「指示待ち」をしているからです。富山県は、地方分権に向かって動いており、今の知事は意欲的な方ですが、具体化には様々な障害が立ちまわっていると思います。

そこで、大学に、そうした企画の中にひとつの役割を持たせて、位置付けてもらってもいいと考えています。そうしないと、北陸、東海の活性化は難しいと思います。

**一北陸、東海の活性化には何が必要なのでしょう
か？**

西頭 関東圏、関西圏に比べて、名古屋に何が欠けているかという文化だと思うのです。関西には京都、奈良があり、文化がある。東京には江戸文化の流れがある。もし、名古屋、静岡あたりに世界に誇れる文化の先端ができれば、すごいと思います。

富山も同じことです。私も富山県の生まれですが、富山県の人には驚くほど真面目です。しかし、気が小さいというか、今ひとつ、自分をアピールできません。謙譲の美德とは言いますが、今の時代にはそれでは通用しません。

自己主張ができないのはなぜかという文化の裏づけがないからだとは私は思います。つまり自分達に自信がない。例えば、関西は、京文化の裏づけがあるから、外に対して胸をはって接することができます。

そこで、富山大学のテーマをさらに打ち出すと

したら、それは文化だと思います。大学の他にこれをやれるところはありません。人文学、教育学、経済学、芸術等、まさに文化の花咲くようなものを持っています。

そうした文系の特質をもっと地域の中に入れて、地域を引っばるような形になればいいと思うのです。今はそこが弱いので、今後の課題になるでしょう。

今、地域連携推進機構の「地域づくり・文化支援部門」の教員が活発に活動していて、そうした文化の問題に一生懸命に取り組んでいます。成果を楽しみにしています。

インタビューを終えて

「立山マルチヴァース」のマルチヴァースという言葉は初めて耳にするものでしたが、多様な考え方を相互に理解し合うための教育の初めに、まず、自分と自分を取りまく地域を知ることを置いているのが、興味深かったです。

多様化する現代社会において、「教養」とは何かという問いの難しさは増していきと思います。「知の東西融合」、世界の知をつなげていくことを自らの使命であると自負する富山大学の教育への真摯な取り組みが、その回答を得ることにつながっていくように感じられました。